

それのみならず、かまくらにも御勘氣の時、千が九百九十九人はおちて隨候人人も、いまは世間やわらぎ候かのゆへに、くゆる人人も候と申すに候へども、此これはそれには似るべくもなく、いかにもふびんには思おもいませ候へども、骨に肉をばかへぬ事ことにて候へば、法華經に相違せさせ給たま候はん事を叶なまじき由、いつまでも申ま候べく候。恐恐謹言。

二月十六日

日蓮 花押

新尼御前御返事

① わず西：国寺々 2行 愛知県竜谷長福寺

瑞相御書

文永十二年（一二七五）二月、五十四歳。於身延。四条金吾宛。七紙断
身延山久遠寺曾存。（定八七二頁）

夫それ天てん變へんは衆しゆ人にんのおどろかし地じ天てんは諸しよ人にんをうごかす。仏ほとけ法ほ華け經きやうをとかんとし給たま時とき五ご瑞ずい六りく瑞ずいをげんじ給たま。其その中なかに地じ動どう瑞ずいと申まは大地だい六りく種しゆに震しん動どうす。六りく種しゆと申まは天台たい大師だい文もん句くの三さん釈しやく云い、（東とう涌ゆ西さい没めつとは、東方とうは青せい、肝かんを主しゆる、肝かんは眼がんを主しゆる。西方せいは白はく、肺はいを主しゆる、肺はいは鼻びを主しゆる。此これ眼がん根こんの功こう徳とく生せいじて鼻び根こんの煩ぼん惱にやう互ごに滅めつするを表ひょうするなり。鼻び根こんの功こう徳とく生せいじて眼がんの中ちゆうの煩ぼん惱にやう互ごに滅めつす。余よ方ほうの涌ゆ没めつして余よ根こんの生せい滅めつを表ひょうするも亦また復たふ云い云い。（妙めう樂らく大だい師し之これを承じやうけて云いく、表ひょう根こんと云いうは、眼がん・鼻びに東とう西さいを表ひょうす。耳みみ・舌ぜつは理りとして南

北に対す。中央は心なり。四方は身なり。身は四根を具す。心は徧く四に縁ず。故に心を以て身に對して涌没を為す。云云。夫十方は依報なり、衆生は正報なり。依報は影のごとし、正報は体のごとし。身なくば影なし、正報なくば依報なし。又正報をば依報をもて此をつくる。眼根をば東方をもつてこれをつくる。舌南方、鼻西方、耳北方、身四方、心中央等。これをもつてしんぬべし。かるがゆへに衆生の五根やぶれんとせば四方・中央をどろうべし。されば国土やぶれんとするしには、まづ山くづれ草木かれ江河つくるしあり。人の眼・耳等驚そうすれば天変あり。人の心をうごかせば地動ず。抑何の経經にか六種動これなき。一切經を仏とかせ給しにみなこれあり。しかれども仏法華經をとかせ給はんとて六種震動ありしかば、衆もことをどろき、弥勒菩薩も疑、文殊師利菩薩もこたへしは、諸經よりも瑞も大に久ありしかば疑も大に決しがたかりしなり。故妙樂云、何れの大乗經に集衆・放光・雨花・動地あらざらん。但し大疑を生ずること無し。等云云。此積の心はいかなる経經にも序は候へども、此ほど大なるはなしとなり。されば天台大師云、世人以らく蜘蛛掛れば則ち喜び来り、鴉鵲鳴けば則ち行人至ると。小すら尚徴有り、大焉瑞無からん。近きを以て遠きを表す。等云云。夫一代四十年が間なかりし大瑞を現じて法華經の迹門をとかせ給ぬ。其上本門と申は又爾前の経經の瑞に迹門を對するよりも大なる大瑞なり。大宝塔の地よりをどりいでし、地涌千界大地よりならび出し大震動は、大風の大海を吹ば大山のごとくなる大波のあしのはのごとくなる小船をひほにつくがごとくなりしなり。されば序品の瑞をば弥勒文殊に問、涌出品の大瑞をば慈氏は仏に問たてまつる。これを妙樂積云、